
自転車と絆創膏と縁結びのお守り

ほしの すばる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自転車と絆創膏と縁結びのお守り

【Nコード】

N4501E

【作者名】

ほしの すばる

【あらすじ】

一ヶ月前、槇原美波は付き合っていた井ノ迫陸と別れた。そのシヨックから立ち直れずにいる美波は、渡壁将仁という青年と出会う。将仁は瀬戸田から自転車で千光寺に縁結びのお守りを買いに来たという。迷惑なくらいおせっかいで明るい性格の将仁に、美波はふりまわされて……。

第1話（前書き）

尾道が舞台の恋愛小説です。ローカルな部分が多いと思いますが、よかつたら読んでみてください。

第1話

井ノ迫陸いのしづのことを二年間片想い続けて、八ヶ月間付き合っ
て、そして別れた。

原因は、陸の浮気だった。いや、あれを浮気と言ってもいいの
だろうか。私は複数いる彼女の中の一人にすぎなかっただけ。それに
気付いていなかったにすぎない。

中学二年生の一学期に横浜から尾道に転校してきた陸は、頭も良
くてイケメンでスポーツ万能だったから、すぐに女子生徒の人気者
になった。当然私も陸に一目惚れした。でも、告白する勇気がなく
で。自信がなかったわけじゃない。自分で言うのもおこがましいけ
ど、私どっちかっていうとかわいい顔しているから、男子から何人
も告白されたことはある。だけど、断ってばかりだったから付き合
った経験はない。そのせいか男子と話すのは苦手で、陸にもなか
な告白するチャンスは訪れなかった。

そんなこんなでトロトロしているうちに、卒業式を迎えた。そこ
で私は思い切って陸に告白した。OKの返事がもらえた時はもうす
ごく嬉しかった。こんなことなら早く告白すればよかったと後悔
した。だって、私と陸は違う高校に通うことが決まっていたのだか
ら。おかげで付き合いようになっても中学の時のように毎日学校で
顔を合わせることはできなかった。しかも、陸の通う高校は進学校。
日に数回のメールのやりとりをして、月に一回デートするくらいだ
った。それでもかまわなかった。陸のことが独占できるなら。

って、ずっと思っていた。

でも、それは私の勘違いだった。

陸にしてみれば、いっしょに遊ぶ女の子が一人増えただけにすぎ
なかったのよね。

どうしてそのことに早く気が付かなかったのだろうか。気が付いていれば、告白なんかしかったのに。
ううん、やっぱりしていたと思う。

当時の私は、自分は陸にとって特別な存在だって思い込んでいた。他の女の子とは違うんだって。

そういえば、友達にも言われたっけ。陸はやめておいた方がいいって。けど、私には友達の言葉が聞こえていなかった。友達にもよく注意されていたけど、私って好きな人ができると周りが見えなくなるタイプらしい。

陸と別れて一ヶ月。

いまだにふっきることができない私は、陸との思い出の場所にいた。

立花海水浴場。

思い出っって言っても、今年の夏に一回いっしょに海水浴に来ただけだけど、私にとっては

忘れることのできない思い出の場所だった。

さすがに十一月にもなると、こんな所にいるのは私と釣りをしている数人のおじさんだけ。

私は砂浜に座り込んで、行ったり来たりする波をぼんやりと眺めていた。

脳裏には暑かった夏の記憶が蘇ってくる。

夏休みに入っですぐに陸が海水浴に行こうと誘ってくれた。陸の方からどこかに行こうと誘ってくれたのは初めてのことで、私は有頂天になっていた。

でも、私は泳ぐのが苦手だから、浮き輪でぶかぶかと波に流されながら浮かんでいるだけだった。

そんな私を見て、陸はこう言った。

「海に浮かんでいる美波はその名前の通りの子だね」

「どういうこと？」

「美しい波のよう、ってことだよ」

こんな齒の浮くような臭いセリフも、私にとってはミルクチョコ
レートよりもメイプルシロップよりも甘いささやきだった。

あの頃の私は恋に恋する乙女だったのかもしれない。

そして、その気持ちは過去形にはならず、現在進行形だった。

心のどこかで私はまだ陸のことを好きでいる。その証拠に私は季節はずれの麦わら帽子なんかをかぶっていたりする。

海水浴に来た時、帽子を忘れた私に陸が買ってくれた……初めて
のプレゼントだった。

「髪、切ろうかなあ」

私は長い髪の毛を人差し指に巻きつける。陸は髪の毛の長い女の子が
好きだって言っていたからずっと伸ばしていたけど、もうそんなこ
とを気にする必要もなくなっただし。

「はあ」

出るのは、ため息と涙だけ。

私がふった男の子たちもこんな切ない気持ちだったのかな。私、
相手の気持ちなんか考えずに即答していた。少しは相手の気持ちも
考えてあげなきゃだめだね。告白するのだって、すごい勇気がい
ることなのだから。

にしても、私ってこんなに弱い女だったわけ？

お姉ちゃんなんか彼氏と別れて一ヶ月もしないうちにさっさと新
しい彼氏作ったっていうのに。

私にはとてもじゃないけどお姉ちゃんのような生き方はできそう
にない。

「海、冷たいかな？」

なんてことを思いながら、私は立ち上がるとゆっくりと海の方へ
と足を進めていった。

右手を海に入れてみた。

「やっぱ冷たい。このまま海に入ったら凍死と溺死、どっちが先な
んかな？ ま、どっちも嫌じゃけど」

死にたい、とは思えなかった。

さすがに私もそこまで悲觀的に物事を考える女ではなかったらしい。

そんな自分にちょっとだけ安心した。

「ちよつと待った!」

「え?」

背後から誰かが私の右手を驚づかみしてきた。そして、そのまま後ろへ引き戻される。

足元が砂場ということもあって、私はバランスを崩して尻餅をつく形で倒れた。

「早まんなあや! 何があつたか知らんけど、命を粗末にしたらいけないじゃろうが!」

「?」

見上げると、褐色の肌の青年が息を切らしながら怒鳴っていた。

何かスポーツでもしているのか、ジャンパーを着ていても体躯の良さがわかる。年は私と同じくらいかな。

もしかして、私自殺すると思われていた?

「悩みがあるんなら相談に乗っちゃるけえ」

真摯な眼差しで言われてしまった。誤解とはいえ、今時初対面の人間にそんなことが言える人も珍しい。国宝級ものだ。

とりあえずは誤解を解かないと。

「あ、あの……私自殺しようとしたわけじゃないけえ」

「……………」

青年は状況が把握できないのかしばし呆然とした顔をしていた。

そして、自らの早とちりに気付いたのであろう。

「すみません!」

青年は何度も頭を下げて謝ってくれた。

「いいよ。私も誤解招くような行動したんがいけんかったんじゃけえ。けど、私死にたいような顔しとった?」

「あ、いや。顔はよう見えんかったけえ」

バツが悪いのか、青年は私と目を合わせようとはしない。

でも、よく見てみるとけっこうカッコいい顔しているかも。ま、陸には劣るけど。

私は砂を払いながら立ち上がりうとして、右の小指に痛みを感じた。見てみると、血が出ていた。倒れた時に貝殻が何かで切ったんだと思う。たいしたことないけど。

「血が出ると！ はよう手当てせんと！」

それに気付いた青年は大げさに言う、背負っていたリュックサックから絆創膏を取り出して、私の小指に貼ってくれた。

「あ、あの……」

「あ、ごめん！」

青年は慌てて手を離す。

典型的な『良い人』タイプかも。

「おもしろい人じゃね。私は槇原美波^{まきはらみなみ}」

「お、俺は……」

と、青年が言いかけて、私は青年の背後……つまり海に視線が釘付けになった。

見慣れた麦わら帽子は浅瀬で波に揺られて浮かんでいた。

私は咄嗟に自分の頭に手をやる。

ない！

私の頭にあるはずの麦わら帽子が。

ってことは、やっぱりあそこでゆらゆらと漂っているのは、私の麦わら帽子。

さつき手を引っ張られた時の反動で海に落っこちたんだ。

「私の麦わら帽子、取ってきて！」

私は麦わら帽子を指差した。青年は私が指差した先を見る。

「俺が？」

「当たり前じゃろ！ あんたが私の手を引っ張ったりせんかったら帽子が飛んでいくことはなかったんじゃないけえね」

私は名も知らぬ青年を海に向かって突き飛ばした。

青年は何か言いたそうな顔をしていたけど、ジャンパーを脱ぎ捨

てると海に向き直る。そして、今度はスニーカーと靴下を脱ぎ、ジーンパンの裾をまくりあげた。

「だーっ」

青年は雄叫びを上げて、海の中へ入っていた。

「冷たてえっ！」

って、声が聞こえてくる。ジーンパンの裾を上げた所までしつかり海の中に浸かっていた。気が動転していたとはいえ、ちょっと申し訳ないことさせちゃったかな。

青年は麦わら帽子をつかむと、じゃばんじゃばんと波を蹴りながら海から上がってくる。

私は駆け寄ってすぐに麦わら帽子を受け取ると、持っていたハンカチでふいた。

「それ、そんなに大事なもんじゃったんか？」

「……………」

私は答えられずにいた。

「早とちりして迷惑かけてごめん」

青年は脱ぎ捨てた物を拾い集めながら、砂浜から上がっていく。ありがとっ、の一言が言えなかった。彼は善意でやってくれたことなのに。さっき相手の気持ちも考えるようにしようって決めたばかりなのに、これじゃ私お礼も言えないすごく嫌な女じゃない。

「あ、そっぴゃあ」

青年の言葉に、私は振り向く。

「この辺に自転車屋さんなかったっけ？」

第2話

「あんだ、足もないのに向島に来てどうしようたん？」

1BOXカーの助手席でお姉ちゃんが呆れた口調で言っている。
まきはらなつみ

槇原夏未。二十一歳。市内の地方銀行に勤めている私のお姉ちゃん。顔は私に似て美人だけど、性格がきつい。思ったことは何でも口に出して言うてしまう。でも、おせっかいなところがあるから、年下にはウケがいいらしい。

「別にお姉ちゃんには関係ないじゃんか」

私は膝の上に置いてある麦わら帽子のつばを握りしめた。彼氏のこと忘れられないから、なんて言ったらバカにされるのがわかってるから絶対に言わない。

「デートの最中にわざわざ迎えに来てやったのにそういうかわいくないこと言う？」

「ええじゃんか。家でゲームしてただけなんじゃから」

そう言うてくれたのは、車を運転している村神剛史さん。
むらかみつよし

お姉ちゃんの現在の彼氏。二十四歳。お姉ちゃんと同じ銀行に勤務している。お姉ちゃんにはもったいないくらい『良い人』。年下ばかり彼氏にしていたお姉ちゃんにしては珍しく年上だったりする。

「だめだめ。この子は甘やかしたらすぐ図に乗るんじゃない」

「おせっかいすぎるのもどうかと思うけど」

助手席側の後部座席に座っている私は小声で呟く。

「すみません！俺のせいで姉妹の絆に亀裂を入れてしまつて……」

私の座席の更に後部座席から大げさに謝る声が聞こえてきた。さっきの早とちり青年である。その横には青年の自転車が積んでいる。自転車のチェーンが切れて困っているみたいだったから、麦わら帽子を拾ってくれたお礼に自転車屋まで乗せていってあげるこ
とになったわけ。

「あー、ええつてええつて。それより、誰なん？」

と、お姉ちゃん。

そういえば、名前まだ聞いてなかった。

「俺ですか？」

「他に誰がおるん？」

青年の戸惑いに、躊躇なく突っ込みを入れるお姉ちゃん。

「俺は渡壁将仁」
わたかべまさひと

そこで青年——渡壁くんが私に何やら期待の眼差しを向けてきたような気がした。けど、私が無反応なのを確認して、ガツカリした表情を見せる。

「何歳なん？」

「十六歳」

私と同じ年だ。

「瀬戸田から自転車で来たんじゃないけど、因島大橋を渡つとる時に急にチェーンが切れてしもうて。で、向島で自転車屋がないか探しようたんです」

「それで美波に会ったわけ？ ラッキーじゃったね、渡壁」

出た。お姉ちゃんの初対面なのに年下とわかったらいきなり呼び捨て、が。

「うち、自転車屋なんよ」

自慢げに言うお姉ちゃん。まあ我が家が自転車屋だから、こうしてお姉ちゃんを呼んで家まで自転車を運んでもらおうとしたわけだけど。

それに十一月の寒空に濡れたジーンパンをいつまでもはかせておくわけにはいかないもんね。まあ元の原因は渡壁くんの早とちりなんだけど。

「にしても、チャリでわざわざ尾道まで何しに来たん？ あ、瀬戸田ももう尾道か。ややこしいなあ」

と、お姉ちゃん。瀬戸田は数年前に合併して尾道市になっている。「まさかベッチャーを見に来たわけじゃないんじゃない？」

ベッチャーっていうのは、毎年十一月三日にやる尾道に昔からあ

る伝統的な祭り。ベタ、ソバ、シヨーキーっていう武悪面、般若、天狗の面をかぶった人たちが、祝い棒と言われる棒で子供たちの頭を叩いたり体を突いたりするという一風変わったお祭りである。ベタたちに叩かれた子供は一年間病気をしないとされているんだけど、子供たちにとつてはただ泣き叫ぶだけの恐怖のお祭りではない。私も子供の頃はお父さんに連れてこられて怖くて大泣きした記憶がある。あまり好きなイベントではない。

「知り合いに頼まれたんです。千光寺で縁結びのお守りを買_こうてきてほしいって」

「千光寺に縁結びのお守りなんかあるん？」

私は聞いた。

「美波、知らんのん？ ご利益があるって、けっこう有名じゃない」

「ホンマにいい？」

私は半信半疑でお姉ちゃんを見る。

車がちょうど尾道大橋の料金所で一旦停まる。

「ここに証人がある！ お姉ちゃんは千光寺で縁結びのお守りを買って、良い彼氏に巡り合えたんじゃないから。ねえ、剛史」

お姉ちゃんが村神さんに通行料金を渡しながらにつこりと微笑みかける。

それって何個目の縁結びのお守り？ って、聞きたかったけど、村神さんは今までの彼氏の中で一番やさしいから別れられても困るので黙っておこう。

「何、その疑いの眼差しは？ ロマンの欠片もない子じゃねえ。そんなんじゃけえ、男に愛想つかされるんよ」

「違うわ！ 愛想つかしたんは私の方よ！」

思わずムキになって大声を上げる。膝の上の麦わら帽子が私の拳で潰れる。

一瞬にして車内の空気が凍りついたのがわかった。けど、言っってしまった以上もうどうすることもできない。私はバツが悪くなり、窓

の外に目を向けた。

車が尾道大橋を渡っていた。この尾道大橋と並行して架かっているのが新尾道大橋。尾道と向島を結ぶ双子橋なんて言われている。週末になると新尾道大橋はライトアップされて、尾道水道の夜景を彩る。

眼下の波止場にはいくつもの漁船が連なっている。私はそんな港町くさい尾道が嫌いじゃなかった。

「美波ちゃんはいかいいからすぐに彼氏できるって」

尾道大橋を渡り切ってから村神さんがフオーローしてくれた。

「だめだめ。この子は私と違って男を見る目がないんじゃないやけえ」

お姉ちゃんの言葉に反論する気にもなれなかった。でも、お姉ちゃんの言うことにも一理あるかもしれない。

周りが見えなくなつて、友達の忠告も聞こうとしないから、こういう結果を招いてしまったのだ。そこは反省すべきだと自分でも思う。

「渡壁は彼女とかいるん？」

「おつたら、せっかくの連休なんじゃけえ彼女とデートしてますよ」

お姉ちゃんの遠慮のないストレートな質問に、渡壁くんは気を悪くした風でもなく笑顔であっけらかんと答えた。

「そりゃそうじゃね。じゃつたら、この子なんかどう？ まあ見た

目しか取り柄のない子じゃけど」

「ちよつとお姉ちゃん！ 知り合つたばかりの子に何失礼なこと言おうるんね！」

私は後ろからお姉ちゃんの首を絞めた。つたく、いつも何の考えもなく突拍子もないこと言うんだから。

「そ、そんなことなあですよ！ 槇原さんは顔だけじゃなくて……」
渡壁くんは後部座席から立ち上がって急にいきり立った。

啞然とする私とお姉ちゃん。

「あ、何でもないです」

自分の言動に気付いた渡壁くんは真っ赤な顔をして再び後部座席に腰を下ろした。

「よく見てみいや。渡壁、ええ男じゃなか。お姉ちゃんの直感だと性格も良いとみたね」

「あれで？」

お姉ちゃんと私は小声で話す。

私は後ろをチラ見する。

渡壁くんはまだ真つ赤な顔をしていた。そういう顔をされると、私もどう対応したらいいのかわからなくて困るんだけど。

車が停まった。

「はい、到着」

村神さんが今までの微妙な空気を取り払うような、清々しい笑顔で言う。この人、癒し系だなあ。

マキハラ自転車店。久保の海岸通りにある古びた店だった。

ここが私の家でもある。都会とかならともかく、自転車なんて今じゃホームセンターかスポーツ用品専門店で買うのが主流のご時世に自転車だけ扱っている店も珍しい。っていうか、潰れない方が不思議である。固定客が何人かはついているみたい。

ガラス張りの引き戸を開けると、店内には持ち主を待ちわびている自転車数台並んでいた。

「ただいまあ」

「おかえり」

住居になっている奥からお母さんが顔を見せる。

娘の私が言うのも何だけど、四十三歳のおばさんとは思えないほど若々しい。お姉ちゃんと三人で歩いていると、いつも三姉妹と勘違いされる。あの昔堅気なお父さんにはもったいないくらいの美人である。『美女と野獣』という言葉はこの二人のためにあると言っ

ても過言じゃないくらい、不釣り合いな夫婦だった。だから、私は小さい頃に一度だけ「どうしてお父さんみたいな人と結婚したの？」って質問したことがあった。お母さんはニコニコ笑って「おバカなところがかわいかったから」って答えた。その時のお母さんは菩薩様のように見えた。あんなお父さんだからきつとお母さん以外に面倒見てくれる人がいなかったのだと思う。

「お父さんは？」

「ベツチャーの手伝いに行つとるけえ、帰ってくるのは夕方じゃないかねえ」

って、お母さんは言っているけど、帰ってくるのはたぶん夜。打ち上げとか言つて夜遅くまでみんなでお酒飲んで大騒ぎするに決まっている。

正直、私はお父さんのことが好きじゃなかった。高校だって、本当は陸と同じ私立の進学校に行きたかったのに、「勉強する気があるんじやったら私立なんか行かんでも学費の安い公立でえかろうが」とか言つて受験させてもらえなかった。

自分は好き勝手なことばかりしているっていうのに。

「珍しいね。美波がお父さんに用事があるじゃなんて」

「私じゃない！　ちよつと知り合いの自転車を直してもらおうと思っただけじゃけえ」

「急ぐんね？」

「えーつと」

私が返事に困っていると、渡壁くんが車から降ろした自転車を店の中に持つて入ってくる。

「こんにちは」

軽く会釈する。

「たっだいまあ」

「お邪魔します」

続いてお姉ちゃんと村神さんが入ってくる。

「どうせお父さん、おらのんじやろ」

「お姉ちゃん、わかつとたんなら早く言ってくればいいのに」

「何言おうるんね。お父さんがベツチャーの手伝いに行くんは毎年のことじゃんか」

確かにそうだった。最近、お父さんの存在を気に掛けないようにしていたからすっかり忘れていた。

「渡壁、時間は大丈夫なん？」

「ここまで来れば泊めてくれる所はあるんで、明日までに修理してもらえたら大丈夫ですから」

「何だったらうちに泊まればええが」

と、お母さん。

出た。お母さんの困っている人は放っておけない癖が。

「そうじゃね、その方が手っ取り早うてええじゃん」

と、今度はお姉ちゃん。

どこまで人が良すぎるのよ、うちの母と姉は。年頃の娘がいるっていうのに、同世代の、しかも今日知り合ったばかりの男の子を泊めるなんてありえない。

普通の人ならここは辞退するはずね。

渡壁くん、断るよね？

私は渡壁くんの返答を待った。

「でも、そこまで甘えたら」

そうよ、そのまま断るのよ。

「気にすることないって。これも何かの縁じゃん」

もうお姉ちゃん、何ってこと言いだすのよ。これじゃあ渡壁くんが断れなくなるじゃないの。私は心の中で叫んだ。

そして、渡壁くんの口から出た答えは。

「ホンマですか？ まさに地獄に仏とはこういうことを言うじやろうなあ。日帰りのつもりじゃったけえ、ホテルに泊まるだけの金もないし、正直どうしようか焦ったとこじゃったんです」

「渡壁、若いのに年寄りくさいこと言うんじゃねえ」

「周りにそういう人が多いもんで、つい」

渡壁くんとお姉ちゃんは笑っていた。

何、そこで和んじやってるわけ？

そうだ、村神さん。村神さんなら止めるよね。大事な彼女の家に若い男が泊まるなんてこと、反対だよ。

「じゃあ、今晚はごちそう作らんとね。もちろん、剛史くんも食べさせてえね」

「当然じゃなか。ね、剛史」

「はい」

村神さんは笑顔で答えた。

私は脱力した。

村神さんが最後の砦だったのに。

あ、そっか。私が反対すればいいんだ。どうしてこんな簡単なことに気が付かなかったんだらう。

「私、反対！」

その言葉に和んでいた空気が重たくなった。
のも、一瞬だった。

「あ、そっかいやあジパンが濡れとったね。ちよつと待つとって。確か剛史のジパンがあつたけえ。背格好似とるから、合うじゃろ」
お姉ちゃんは早口でまくしたてると、自分の部屋へ上がっていった。

「じゃあ、お母さんは買い物に行ってくるけえね。将仁くん、遠慮せんとゆつくりしていきいね」

お母さんはそう言つて、そのまま出かけた。

私の言葉はまったく無視されていた。

あれ？ お母さん、今渡壁くんのこと下の名前で呼んでなかった？
お母さんにはまだちゃんと紹介してないはずなのに。聞き間違
い？

「親切なお母さんとお姉さんじゃね」

「おせっかいなだけじゃろ」

私のことは無視してさ。私と渡壁くんとどっちが大切なのよ？

「そこがナツちゃんとお母さんのいいところじゃけえ」
村神さんが小さく呟く。

私にはゴーイングマイウェイな家族のことなんか理解できなかった。でも、私はまたこの家族に振りまわされるんだ。
そんな嫌な予感がした。

第3話

おせっかいなお姉ちゃんは、村神さんの車で渡壁くんを千光寺山に上がるロープウェイ乗り場がある山麓駅まで送ると言い出した。自分は運転しないくせに。

まあそこまでは予想できたことだからまだ許せる。だけど。

「どうして私までいつしよに行かんといけんのん？」

私はお姉ちゃんに強引に車へ押し込まれて、後部座席に座っていた。

嫌な予感の中かもしれない。

「渡壁に尾道の案内してあげりやあええじゃんか」

「じゃけえ、どうして私が？」

「だって、この中でヒマ人なんは美波だけじゃんか」

「ヒマじゃないもん！」

「じゃあ何するんね？」

「そ、それは……」

私は言葉に詰まった。実際は何もすることなんかないのだから、答えられるはずもない。

「ほれ、みてみいや。何もすることないんじやつたら、渡壁に道案内しちやりいや。あ、せっかくじゃけえ、ベツチャーも見てくりやあええじゃん」

お姉ちゃんはそう言って、村神さんに長江口のバス停で車を停めさせると、私と渡壁くんを半ば強引に引きずりおろす。

「ちよつと、お姉ちゃん！」

「楽しんでおいでいや」

「はい、何から何までありがとうございます！」

渡壁くんは律義に頭を下げていた。

「ちよつと、何お礼なんか言つてんのよ？」

「今時の子にしてはちゃんとお礼が言えるとは、感心感心」

お姉ちゃんは言いたいことだけ言つて、助手席に乗り込む。運転席では村神さんが笑顔で手を振っている。

そして、車は無情にも私と渡壁くんを残して発進していった。どうしてこういうことになるのよ？

歩いて家に帰れない距離でもないけど、やはりここは人として土地勘のない渡壁くんを一人残すわけにはいかない。

「ベツチャー、こつちじゃけえ」

仕方なく、私は人だかりの商店街へと渡壁くんを道案内した。

商店街では子供の泣き声が木霊していた。

怖いお面の下は普通のおじさんだつてわかつていても、私だつて今でもあんまり近づきたくない。子供ならなおさらだよな。

「相変わらず人が多いのお。俺も叩かれてこようかのお」

「本気で言つてんの？」

「だつて病氣にならんのかな？」

「それつて迷信じゃなか」

「何事も信じる気持ちが必要なんよ」

そう言つて、渡壁くんはベタやショーカーを目指して人ごみの中をかき分けて行つた。

けっこ子供っぽいんだ。

私は渡壁くんが迷子にならないように、少し離れた所から彼の姿を目で追っていた。

まずベタに行く。頭を叩かれて痛そうな顔をしている。

今度はショーカーの方に行つて頭を叩かれている。

もうやめておけばいいのに。懲りないなあ。もしかして全員に叩かれようとしているんじゃないだろうか。

予感的中。

渡壁くんはソバに叩かれた後、獅子に頭をかじられていた。

渡壁くんは痛そうな顔をしながらも楽しそうに笑っていた。

もしかして、M？

なわけないか。けど、無邪気にはしゃぐ渡壁くんを見ると、こつちまで自然と笑みがこぼれてくる。

嫌な気持ちも全部吹き飛んでいってしまいそうだった。

「美波？」

ふいに背後から聞きなれた声で名前を呼ばれて、私の体は硬直した。

聞き間違えるはずがない。

この声は……。

井ノ迫陸だ。

何で高校生にもなってベツチャーになんかに来ているのよ？

私は振り向くことができなかった。

「美波だろう？」

陸が私の前に回ってきた。私は咄嗟にうつむく。まだ陸の顔、まともに見ることはできなかった。

「やっぱ美波じゃん。美波もベツチャーに来てたんなら、誘えばよかったかな」

下を向いていても陸の両隣に女の子が立っているのがわかる。相変わらず女には苦労してないんだね。

「ねえ陸、この子誰？」

「元カノ？」

「まあそんなとこかな。俺、ふられちゃったの」

「うつそー？ 陸をふる女がこの世にいるなんて」

「ありえないーい。何様のつもり？」

その鼻から抜けるような声を聞いているとムカつくけど、今の私は何も言い返すことができなかった。

そんな自分が情けなくて悔しくて涙が出そうになる。でも、ここで泣いたら負けだから、意地でも泣くわけにはいかなかった。

「ごめん、待った？」

うつむく私の肩を誰かが引き寄せた。

渡壁くんだった。

私は彼の胸に身を寄せる形になってしまつた。

「この人たち、誰なん？ 友達？」

渡壁くんの言葉に、私は黙って首を横に振ることしかできなかった。

「俺の連れに何か用？」

「何だ、ちゃっかり男作ってんじゃない。まあ顔だけは人並み以上だったからな」

陸の吐き捨てるようなセリフが、私の胸に突き刺さった。私つて、陸からそんな風に思われていたんだ。

陸はそれ以上何も言わず、女の子を連れてどこかに行ってしまった。

私はショックのあまり動くことができなかった。

「俺、余計なことしたかのお？ てつきり変な奴にからまれとんじやばあ思うとつたけえ」

確かにコテコテの登場に仕方だったな。けど、それは渡壁くんなどの誠意の現れだったんだと思う。

「うつん」

何とか声を絞り出すと、硬直した体も少し萎えていった。

「ベツチャーも満喫したし、今度こそ目的の千光寺に行くとするかのお」

私は黙ってうなづくことしかできなかった。

第4話

私たちは山麓駅からロープウェイに乗って、千光寺山に向かった。ロープウェイが山頂に近づくにつれて尾道水道が一望できるようになる。でも、私は外の景色なんか見る気になれなかった。

渡壁くんは嬉しそうに眺めているけど。

「子供の頃、ロープウェイに乗って、あの玉を見下ろすのが大好きじゃったんじゃ」

渡壁くんが言っているのは、玉の岩と言って烏帽子の形に見える岩の天辺にある大きな玉のこと。

「あの玉って、昔は本物の宝玉じゃたらしゅうて夜になるとぴっかぴっか光るけえ瀬戸内海を行き来する船にとっては灯台みたいなもんじゃったんじゃと」

渡壁くんが玉の岩についての伝説を語り始める。

「それを聞いたどっかの国の皇帝がその玉を手に入れとうなって部下たちに『その玉を取ってこい！』って命令したらしいんじゃ。それで、やつとの思いで玉を手に入れたんじゃけど船に運ぶ時に海に落としてしまったんじゃと。今でもその玉が海の底に眠っとるらしいで。そんなん見つけたら大金持ちになれるのお」

「そうじゃね」

はしゃぐ渡壁くんに対して、私はそっけない返事しかできなかった。まだショックから立ち直れていないみたい。

「俺、金持ちになつたら……」

渡壁くんはずっとしゃべっていた。けど、だんだん渡壁くんの声が私の耳に入ってこなくなる。渡壁くんの声だけじゃない。ロープウェイに乗っている他の人の声も雑音も聞こえない。私一人だけがまるで違う空間に隔離されているみたいな感覚だった。

ガタンと、ロープウェイが揺れると同時に外界を遮断していた壁みたいなものが壊れたような気がした。

「じゃけえ、そういうのは自分で買いに行った方が御利益あるけえ自分で買いに行きやあええじゃん、って言うたんよ」

渡壁くんの声が聞こえてくる。どうやら縁結びのお守りを頼んだ人のことをしゃべっていたみたい。

「そしたら」

渡壁くんのトークが終わるのを待ち切れずに、ロープウェイは山頂駅に到着した。そこで一旦、渡壁くんは話を切った。

千光寺は山頂駅から少し下った所にある。

千光寺山は桜の木が多くて、春になると桜が満開に咲き誇る。『さくら名所百選』に選ばれるくらいで、尾道では一番有名な桜の名所である。

ちなみに今の季節だと菊花大会をやっている。

「お、展望台」

渡壁くんは前方にある展望台を見つける。

展望台は筒状の二階建ての建物で、一階は細くて二階にあるレストランへ続く階段のみになっている。展望台は屋上にある。子供の頃は、この奇妙な造りの建物がまるで宇宙人の基地のように思えてドキドキしていた。お姉ちゃんにはバカにされたけど。

「俺、子供の頃あの展望台は宇宙人の基地かなんかで宇宙人と交信できるんじゃないかと思よったけえなあ」

やっぱり子供の頃はみんなそう思っていたんだ。私だけじゃないと知ってちよつと安心した。

「あれ、渡壁くん。尾道に来たことあるん？」

「昔、住んどった。けど、親の都合ってやつで瀬戸田に引っ越ししたんよ」

「じゃあ私の案内って必要なかったんじゃないか」

「そんなことなあわ。久しぶりに尾道に来たらけっこう変わつとるけえ、ビックリしたんじゃないけ。じゃけえ、展望台から尾道を見てみ

たいんじゃ」

そう言われたら止めるわけにもいかない。

何か渡壁くんがお姉ちゃんと同じ人種に思えてきた。

結局、私も展望台に上がって尾道の町並みのパノラマを見下ろしていた。

陸、まだ商店街にいるのかな。あんなこと言われたのに、まだ陸のことが気になるなんて。私、陸の何を見ていたんだろう。外見だけ、って言うなら、私も陸と同じだね。

お姉ちゃんの言ったとおりだ。私って、男を見る目がない。

やばい。何か涙出そうになってきた。

「はい」

いきなり眼前にオレンジ色のソフトクリームが出現した。

「しまなみオレンジ味じゃと。俺はとうふ味。あ、こっちの方がえかったら交換しようか？」

そう言った渡壁くんの手には白色のソフトクリームがあった。見た目はバナラ味に見える。

「いや、ええわ」

私はしまなみオレンジ味のソフトクリームを受け取ると、ペロリとなめる。さわやかな柑橘系の味が口の中に広がっていく。

「ごめん。俺、こういう時はどうしたらええんかようわからんけえ」

私はそこで渡壁くんなりに気を使ってくれていたことにやっと気付いた。

「そういえば、渡壁くんは彼女がおらんのんだっけ。今まで付き合ったこともないん？」

「ない」

「でも、好きな子くらいはおったじやる？」

「おった。けど……」

「けど？」

渡壁くんは真剣な表情をして黙りこんだ。

もしかして、聞いちゃあいけなかったのかな。まさか病気が事故で死んじゃったとか。

「転校してしもうたけえ、告白することもできんと、それっきり」

「何だ……」

ドラマティックな言葉を期待していた私はガッカリした。
でも。

「尾道に来たんじゃけえ、その好きな子に偶然会うことがあるかもしれんじゃん。ねえ、まだその子のこと好きなん？」

「そ、それは」

渡壁くんは顔を真っ赤にする。その顔を見れば一目瞭然。まだ好きってことだよな。

「けっこう純情なんじゃね。でも、その気持ちわかる。一度好きになった人のこと、そんな簡単に忘れられないよね。例えそれが超ムカツク奴じゃったとしても」

やっぱり陸のことが好き。今日会ってそれを痛感させられた。

ついに涙の防波堤が決壊した。我慢していただけに一度あふれ出した涙は止まらない。

「あ……」

私が泣き出したので、渡壁くんは戸惑っている。そりゃそうだよな。目の前でいきなり女の子に泣かれたら誰だって困るよね。

「ご、ごめん。ちょっとだけ……泣かして」

私は食べかけのしまなみオレンジ味のソフトクリームを渡壁くんに押し付けると、遠慮なく大泣きした。容赦なくあふれ出る涙を両手でぬぐう。

不思議だ。渡壁くんの前だとどうしてこんな風に普通に普通でいられるんだろう。今日知り合っただけなのに。これって、渡壁くんの人

徳かな。

「あ、これ……」

渡壁くんがよれよれのハンカチを差し出してくれた。

「ジャンバーのポケットに入れとったけーよれよれじゃけど、キレイなけ」

私はそれを受け取ると、目頭を押さえた。でも、涙はまだまだ止まりそうになかった。

たぶん五分も経ってないと思う。私の涙タンクの貯水量が空になったのは。

さすがにあれだけ泣くと、気持ちが幾分かスッキリした気がする。

「ハンカチ、洗って返すけえ」

「ええよ、そのままで」

「そんなわけにはいかんわ」

涙だけならともかく鼻水もふいちゃったのに、そんなハンカチをそのまま渡壁くんに戻すわけにはいかない。私はハンカチをスカートのポケットの中にしまいこんだ。

「あ、そういえば、ソフトクリーム……」

「とけようたけえ、全部食ったよ」

「は？」

「さすがに二つも食ったら体が冷えるのお」

渡壁くんはその場で足踏みして両手を擦りながら体を温めていた。私が号泣している間、渡壁くんは二つのソフトクリームをずっと食べていたわけ？

何かその姿を想像すると、腹が立ってきた。

「そんなに寒いんなら、千光寺まで走ればええじゃんか」

「あ、それええ考えじゃな。そんじゃあ、本堂までどっちが先に着くか競争しようや。負けた方がジューズおこるんで」

「えー？」

渡壁くんは私の皮肉を素直に取っただけらしい。

競争って、そんな子供じゃないんだから。

「何でそんなことせんといけんのんね？」

って、私が言った時には、もう渡壁くんはスタートダッシュしていた。

マジで？

「ちよ、ちよっと待ってえや！」

私は慌てて渡壁くんを追いかけた。

第5話

私は急な坂道を転びそうになりながら、必死で走った。けど、渡壁くんと距離はどんどん離れていく。

渡壁くんに追いついたのは、本堂の前だった。速すぎる。まったく、どんな運動神経しているんだか。

「いっちばーん！」

渡壁くんは息を乱すことなく、余裕の笑みを浮かべていた。

あの勝ち誇った顔、ムカツクなあ。

「ひ、ひきょうモン。ハンデくらい……くれたって……ええのに」

私は息を切らしながら抗議した。けど、その声は小さすぎて渡壁くんには届かなかったみたい。

「はい」

渡壁くんが手を差し伸べてくれた。私は彼の手を借りて、本堂の階段を上げる。

私はさい銭箱に気持ちだけの小銭を投げ入れると、両手を合わせる。

お願い、何にしようかな。

「どうか榎原さんにステキな彼氏が現れますように！」

渡壁くんが両手を叩いて、大きな声で言っていた。

私は自分の願いも忘れて、渡壁くんに詰め寄る。

「何言おうるんね！」

「さい銭五百円も奮発したんじゃないやけえ、神様もお願いを聞き入れてくれるじゃろ」

「そう言う問題じゃないじゃろ！」

「あ、そっか。願いは口に出して言うちゃあいけんのんじゃない」
悪びれた様子もなく、あっけらかんと言う渡壁くん。

こいつ、やっぱりお姉ちゃんと同種族だ。こういうタイプには何を言っても意味がないのよね。お姉ちゃんでも何度も痛い目に遭っているからよくわかる。

「よし、参拝も済ませたし。お守りお守り」

足取り軽く先を行く渡壁くん。

お守りは本堂の中にある売店で売っている。売店にはいかにも人の良さそうなおばちゃんがいいた。

「縁結びのお守りを十個ください」

渡壁くんはおばちゃんに縁結びのお守りを指差す。

十個、つてことは十人の人に頼まれたつてこと？ あ、いや一個は渡壁くん本人のかも。

おばちゃんも少しあっけに取られていたけど、すぐに十個を袋に入れてくれた。

「お兄ちゃん、そぎやあに買_こうてどうするんの？」

やっぱりおばちゃんも気になったみたい。

「人から頼まれて」

「ほうじやろうねえ。お兄ちゃんにはかわいい彼女がおるんじゃけえ、必要ないわなあ」

「違います。私、彼女じゃないですから」

私は否定した。

「そんならあんたら付き合えばええが。お似合いでえ」

「ほ、ほうかの？」

渡壁くんはおばちゃんの言葉を真に受けて、まんざらでもない顔をしていた。他に好きな子がいるくせに、何喜んでいるのよ。

「だめだめ。この人、他に好きな子がおるんじゃけえ」

「ありやあホンマねえ。そりやあいけんかったねえ」

豪快に笑うおばちゃん。つられて笑う渡壁くんの方は、どっちかっという苦笑いに近かった。

「ほいじゃあ、お守りの説明しようかねえ」

おばちゃんは親切に縁結びのお守りの説明を始めてくれた。

縁結びのお守りは、赤いヒモでくくられた透明な小ビンと白いヒモでくくられた小ビンが一つずつ入ってセットになったものを言う。女性の場合。

赤いヒモでくくられた小ビンは自分が持ち、白いヒモでくくられた小ビンはタンスの中とかに仕舞っておく。そうすると、相手の男性を探してきてくれるらしい。

そして、相手の男性が見つかると、白いヒモでくくられた小ビンとその男性に渡す。お互いで持っておくと、いつまでも仲良く幸せに過ごせるらしい。

男性の場合は、その逆をすればいいらしい。

「赤いヒモのビンにはかんざし、白いヒモのビンには小判と米が入ってるんよ」

「あ、すみません。もう一個ください」

話を聞いた渡壁くんは一個追加した。これが自分用かな。おばちゃんと言ったことを完全に信じているって感じ。純だね。

「はいよ、お兄ちゃん。想い人をうまくいくとええなあ」

「あ、ありがとうございます」

渡壁くんは縁結びのお守りを受け取った。

やっと目的を果たした私たちは、来る時には下りだった坂道を今度は上がっていく。もうふくらはぎがパンパンだよ。明日は筋肉痛決定だね。

「はい、これ」

渡壁くんは縁結びのお守りが入った袋から一つ取り出すと、私に差し出す。

「私に？」

「御利益あるらしいけえ」

追加で買ったのは、自分用じゃなくて私にくれるためだったんだ。別にそんなの必要ないんだけど、せっかく買ってくれたのに断るのも悪いから、一応もらっておくことにする。

「他は全部頼まれた分？」

「うん」

「十人も？」

「いや、一人」

「一人で十個？」

「四十が近いけえ、焦つとんじやろ」

「その人、女の人が寄り付きそうにないタイプなん？」

「んー、人はええんじやけど。女の人とまともにしゃべれんシャイな性格なんじや。仕事柄、女の人と会う機会も少なあし」

「何の仕事しようるん？」

「ロープウェイの中で言うたの、覚えてないん？」

そういえば、縁結びのお守りを頼まれた人のことをしゃべってたような気がするけど、あの時は周りの声が全然聞こえなくて。

「造船の下請工で、俺の親方」

「俺の親方……？　っていうことは、渡壁くん働いとるん？」

「それもロープウェイの中で言うたろ。ホンマ、忘れっぽいのお」
やばい。これ以上しゃべったら、話を聞いていなかったことがバレてしまう。何か忘れっぽい性格って思われているのは癪に障るけど、ここはあえて黙っていよう。

けど、渡壁くんは気にした風でもなく、話を続ける。

「中二の時に親が離婚してしもうたけえ、俺は働くことにしたんよ。その方が母ちゃんも楽じやろうし。ま、勉強がしとらないってのが本音じゃけど」

何も考えていない能天気な奴かと思ってたけど、けっこう苦労しているんだ。私と同じ年なのにもう社会に出て働いているなんて、少しだけ渡壁くんに同情した。

「俺、お茶」

「はい？」

気が付くと、渡壁くんが自動販売機の前でお茶のペットボトルを指差していた。

ちゃっかりと覚えていたんだ。

同情撤回、かも。これだけしっかりしていたら社会の荒波に揉まれても十分に生きていけると思う。

私たちは自動販売機の前で小休憩することにした。

ロープウェイで山麓駅まで戻ってくると、近くの喫茶店には長蛇の列ができていた。ここのワッフル、美味しいから休日はいつも行列ができている。行く時はそうでもなかったけど、今はちょうどテイクタイムだから半端じゃないくらい人が並んでいる。これだけ並んでいたら私だったら断念するかも、なんて思いながら、通り過ぎていく。

「渡壁じゃん！」

行列の中から一人の青年が飛び出してくる。

あれ、この人どっかで見たことあるような気がするんだけど。どこにでもいそうな特徴のない顔をしているからかな。

「お前、こっちに来る時は前もって連絡せえ言つたろうが」

「手紙送った」

「いつ？」

「昨日」

「アホきやあ。今日来るのに昨日手紙送ってどうするんの！」

会話を聞いていると、二人はかなり親しい間柄だつてのがわかる。昔のクラスメイトとかかな。私の存在は目に入っていないみたい。

「じゃけえ、携帯買ええ言つたじゃろうが」

「そんな金なあわ」

そうだよ。お母さんと二人暮らしなんだもん。そんな余裕はないのかもしれない。日々の生活だけで精一杯なんだわ。

そう思うと、私って恵まれているんだなあ。自分でお金を稼いでいるわけでもないのに、携帯電話とか持っているんだから。今度からちゃんと考えて使おう。友達とのムダ話も控えよう。

「ええじゃんか。結局会たんじゃけえ。それよか、ヨッシーはここで何しようん？」

「何、って。ワッフル食べるのに並んどるんじやろうが」

「お前地元なんじゃけえ、こんな人が多い連休にこんでも平日に来りゃあ並ばんと食べるじやろうが」

ヨッシーと呼ばれた青年は、鼻の穴を膨らませて胸を張った。

「デートに決まっとうろが。彼女がどうしてもこのワッフルが食べたいって言うけえ並んどるんじや」

「デートお？」

「ほうじや。渡壁、携帯はええぞ。彼女とは携帯のサイトで知り合うたんじや。あ、言っとくが、出会い系じゃないぞ。コミュニティサイトで知り合った子がたまたま福山の子じやたんよ。じゃけえ、渡壁も携帯やつぱ持てえや。そしたら、俺のようにかわいい彼女ができるかも……」

そこまで言くと、ヨッシーくんは私の存在に気付いて啞然としていた。

「槇原美波じゃんか！」

「？」

どうしてヨッシーくんが私の名前を知っているわけ？

「俺じゃ、よしおかひさし吉岡久志。同じクラスの」

私が戸惑っていると、ヨッシーくんは自己紹介してくれた。

「同じクラス？」

「中学も三年間ずっと同じクラスじゃったのに覚えてもろってないなんて、シヨックじゃのお」

そう言われてみれば、そんな名前の奴がいたような気がする。

「吉岡くん、渡壁くんと知り合いだったんだ」

「何言おうるんの。渡壁も中二の一学期まで同じクラスじゃったが」
「えっ？」

私の頭は混乱していた。

渡壁くんと私が同じクラスだったなんて、まったく記憶がないんだけど。

「井ノ迫と入れ違いで転校してたじやろうが。あー、こいつ中学ん時はもやしみたいにひよろひよろしとったけえ覚えてないかもしれんのお。しかも、今みたいにこんなしゃべる奴じゃあなかったし」
私は渡壁くんの顔を見た。彼は苦笑していた。

そういえば、陸が来る前に転校していった男子がいたようなないような。記憶があいまいだった。

もしかして、渡壁くんは最初から私のことに気が付いていた？
なのに、どうしてそれを隠していたんだろう。

「それより、渡壁！ お前どうして楨原といっしょにおるんの？
まさか二人は付き合つとるなんて言うじゃないじゃろうの！ ってことは、あのメール本物じゃたなかあ。こんなことなら俺もコケればよかったのお。渡壁一人ばあもうやりやあがつて」

吉岡くんは一人でしゃべり続けていた。

「メール？」

「ほうじゃ！ お前携帯持つてなあのに何でメールの内容知つとつたんの？」

「ヨッシー、さつきから何わけのわからんこと言おうんの」

「これじゃ！」

吉岡くんは携帯電話を取り出して、メールの画面を見せる。

『楨原美波が男と別れました。傷心の楨原美波をおとすのは今がチャンスです。やさしい言葉をかけて慰めてあげましょう』

メールの内容に私の心は凍りついた。

そういえば、最近中学時代同じクラスだった男子からメールが来たり、告白されたりすることが多かった。そのメールは吉岡くん以

外にも送信されているってことだね。

誰がそんなメールを？

陸と別れたことはまだ友達にも言っていないのに。

そのメールを受信しているのが中学時代のクラスメイトばかりなら、信じたくないけど陸がふられた腹いせにやったってことも考えられた。

陸へのくすぶっていた恋の炎が、まるで消防車の一斉放水によって鎮火させられたような気分だった。

「そのメール誰から来たん？」

「それが知らんメアドからじゃったけえ、いたずらじゃあ思ってた。しかし、三年越しの恋を实らせるとはさすが渡壁じゃのお」

「ヨッシー、もうええけえ。はよお彼女のトコに戻りいや」

「ちよい待ちいや。まだ聞きたいことがあるんじゃないけえ」

「また手紙書くけえ」

渡壁くんはまだしゃべり足りなそうな吉岡くんを強引に行列の中へ押し戻した。

私の頭の中はパニックだった。

「槇原さん、あいつの言うとしたことなんか気にせん方がええけえ」
気にするなって言う方が無理だと思う。

「もう自転車直つとるかもしれんけえ、家に戻ってみようや」

渡壁くんは何事もなかったかのような顔をして、私の手を引っ張る。

私は渡壁くんの手を払いのける。

「どうして黙つとったん？」

「黙つとたわけじゃない。ちゃんと名前だって、前にこっちに住んどったことも言うたし。……槇原さんが気付いてくれなかっただけで」

「ぐっ」

痛いところを突かれて、私は言葉に詰まった。

「そりゃ気付かんかった私も悪いけど。気付かんかったら気付かん

で、ちゃんと最初から言ってくれりゃあよかったのに。人を試すようなことして」

私は渡壁くんのが信じられなくなっていた。今まで親切にしてくれたことがすべて偽りのように思えてならなかった。

「人の心の際につけいるようなことして……。最低じゃ」
だまされていた。

そう思った私は、その場から逃げるように走り去った。

渡壁くんの呼び止める声が聞こえてきたけど、私は立ち止まらなかった。

第6話

「ただいま……」

家に戻ると、お父さんが渡壁くんの自転車の修理をしていた。

夜まで帰ってこないと思っていたのに、けっこう早く帰ってきたんだ。もしかしたら、お母さんが呼びに行ったのかもしれない。普段はえらそうな頑固親父だけど、お母さんにだけは頭が上がらない。我が家で一番権力を持っているのは、実はお母さんなんじゃないかと思う。

「美波、戻ってきたんきやあ。お、この自転車の持ち主はどうしたんの？」

私の後ろに誰もいないことを確認したお父さんが聞いてくる。お酒臭かった。

「知らんわ。そのうち戻ってくるんじゃない」

「この自転車、渡壁いう奴のじゃないんか？」

どうしてお父さんが渡壁くんのこと知っているの？ 気にはなつたけど、今は渡壁くんの話なんかしたくなかった。まあ三年前まではこっちに住んでいたのだから、お父さんが知っていても不思議じゃないか。

「確か瀬戸田に引越して、中学校に通うんに自転車がある言つてわざわざうちで買_うていったけえ、よう覚えとるんじゃない。キレイに乗ってくれとったみたいじゃのお」

お父さんは愛おしむように自転車を磨いていた。あいつが褒められていると思うと、腹立たしかった。

「買っただけ買つてずっと乗りようらんかったんかしれんじやんか」「乗りようたか乗りようらんかったかは自転車を見りやあようわかる」

「酔っ払いの目で見て何がわかるん！」

だんだん声が大きくなっていく。

「ワシはこれ二十四年間メシを食うてきとんじゃ。この仕事に誇りを持つとる。酒飲んだぐらいでどうこうなりやあせんわあ」

「何が誇りねえ。客も来ない時代遅れの自転車屋じゃんか！」

私とお父さんの大声に、奥からお姉ちゃんがすごい剣幕で出てくる。たぶん話の内容が聞こえていたんだと思う。

「美波！」

お姉ちゃんが私の頬を叩いた。そこへタイミング悪く、渡壁くんが戻ってくる。

「お父さんに謝り！」

お姉ちゃんに、ううん誰かに頬を叩かれたのは初めてだった。こんなシーンはドラマだけの世界だと思っていたから。

「みんな、大嫌い！」

私はいたたまれなくなつて、二階の自分の部屋へ駆け上がった。

私は部屋に入るなり、ポールハンガーにかけてあつた麦わら帽子をゴミ箱に投げ捨てた。

私、バカだ。

あんな男に買ってもらつた麦わら帽子をいつまでも大事に持っていたりして。

私はベッドに倒れこむと、枕に顔を押し付けて思いつきり泣いた。いろんな感情がミックスされて、今は泣くことしかできなかった。枯れたと思っていた涙タンクの貯水量はけっこう復活していたみたい。

泣き疲れた私はいつの間にか眠っていたらしい。目が覚めると、周りが暗くなっていた。

下から賑やかな声が聞こえてくる。私は携帯電話で時間を確認する。十八時すぎているから、みんなで晩ご飯を食べているんだ。

誰も呼びに来てくれなかった。そりゃあ悪いのは私だけだ。

「おなか、すいたなあ」

私はベッドの上で体育座りして、窓から見えるライトアップされた新尾道大橋を眺めていた。

部屋のドアがゆっくりと開いた。

私は咄嗟にベッドに寝転がり、寝たフリをしよう。

「みいなあみいちゃん」

入ってきたのはお姉ちゃんだった。ケンカした後はいつも甘えた声で私の名前を呼ぶ。今回はお姉ちゃんとケンカしたわけではないけど。

足音でお姉ちゃんが接近してくるのがわかる。

あ、美味しそうな匂いがする。空腹の私は食べ物匂いに敏感になっっていた。

「美波ちゃんの大好きな鳥の唐揚げですよ。今ならもれなくおにぎりが二個ついてきますよ」

お姉ちゃんは私が寝ていないことがわかっていて誘惑してきているのだ。

私は目を見開いた。お姉ちゃんの思うツボだったけど、食欲には勝てなかった。

私が起き上がると、お姉ちゃんは鳥の唐揚げとおにぎりがのった皿を手渡してくれる。目を合わせづらくて、私はそれを受け取るとそっぱを向いて食べる。

「だいたいの原因は渡壁から聞いた」

「……………」

あいつ、ちゃんと本当のこと言ったのかな。

「渡壁、謝ったよ。でも、あんたもいけんわ。中二まで同じクラスにおったんじゃない？ それなのに全然気付いてやらなかったんじゃないけえ。渡壁、男として傷ついたと思うで。好きだった女に顔も名

前も覚えてもらえてなかったんじゃけえな」

「っ！」

私は口の中のおにぎりを吹き出しそうになった。あいつ、そんなことまでお姉ちゃんにしゃべったの？

「男と別れて辛い気持ちはわかるけど、自分だけが不幸じゃなんて思わんことじゃね」

そんなこと言われなくてもわかってる。ただ今はそんな風に前向きに考えることができないだけ。

「渡壁の両親が離婚して、瀬戸田に引っ越したのは知っとなんじゃろ？」

私はうなずいた。知ったのは今日なんだけど。

「離婚の原因は、父親の暴力じゃったんじゃて。母親だけじゃなくて、渡壁も叩かれとったらしいわ。あ。これは渡壁から聞いたんじやないけえね。お母さんが教えてくれたんよ」

「お母さんが？」

「当時、PTAの役員をいつしよにやってたお母さんに渡壁のお母さんが相談しとったらしいわ。お母さん、人の相談事に乗るの大好きじゃけえな。話を聞いたお母さんは『女に手をあげるような男はと別れてしまい！』って助言したんだと」

「……………」

言葉が出てこなかった。

私の知らないところで、うちの両親はどれだけ渡壁くんと関わりあっているのよ？ しかも、簡単に別れるなんて言ったりして。離婚の最大の原因って、私のお母さんのような気がして、渡壁くんに申し訳なかった。

でも、もしかしたらお母さんは最初から渡壁くんのことを覚えていて、うちに泊まればいいなんて言い出したのかもしれない。それなら下の名前で呼んだってのも納得がいく。

「渡壁、言うつったよ、今の自分があるんは自分に親切にしてくれた人たちがおったからじゃって。だから、今度は自分がみんなに親

切にしようって決めたんじゃないか。泣かせるじゃんか」

渡壁くんの必要以上に親切な行動の理由は、みんなへの恩返しだったんだね。

「渡壁、明日には帰るんじゃないやけえ、ちゃんと謝るときんさいよ」

「私があ？」

「当たり前じゃろ。お父さんにも！」

「……やだ」

私は小声で呟く。

今更どんな顔をして謝ればいいのよ。

「つたく、頑固なのはホンマお父さん似なんじゃけえ」

お姉ちゃんはため息とつくと、空になった皿を奪い取り、部屋から出て行った。

お姉ちゃんが一階に降りたとたん、また賑やかな声が聞こえてくる。お姉ちゃんって我が家のムードメーカーなんだなあ。改めて実感した。

「謝る、かあ」

それが簡単にできないから困っているんじゃない。

そういえば、渡壁くんって本当に同じクラスだったのかな。

私はそれを確かめるため、渡壁くんの写っている写真を探すことにした。

アルバムを開く。確か、二年生の一学期にクラス全員の写真を撮ったのがどこかにあるはず。

「あつた」

出席番号順に並んだはずだから、渡壁くんは後ろの方ね。吉岡くんが言うにはもやしみたいにひよろひよろしていたらしいけど。

「んー、これかなあ？」

それらしき人物はいた。でも、今の渡壁くんとは全然雰囲気が違う。何か陰気臭くて、この世の不幸をすべて背負っていますって感じのオーラが出ている。

これが本当に渡壁くん？

「あ、絆創膏……」

渡壁くんの額に絆創膏が貼ってあるのを発見した。そういえば、顔や体によく傷をつけている子がいたっけ。今思えば、あの傷は父親の暴力によってつけられたものだったんだね。

おぼろげだけど、何となく記憶が蘇ってくる。

たぶん、このクラス写真を撮った日だと思う。渡壁くんの額の絆創膏がはがれそうになっているのがすごく気になって、持っていた新しい絆創膏をあげたんだ。

やっぱり私にも榎原家の血が流れていたんだね。そんなの放っておけばいいのに、はがれそうだからってしゃべったこともない男子に絆創膏をあげたりするなんて。

私は渡壁くんにそんなことをしたことすら忘れていたのに、渡壁くんは私のことずっと覚えていてくれた。

ふいに右小指の絆創膏が視界に入ってきた。渡壁くんと再会した時のことを思い出す。私が自殺すると思って止めに来てくれた。あの時はまだ私が誰かなんてわかっていなかったはず。でも、私だつてことに気付いて、私が傷ついていることを知って元気付けてくれたようにしてくれた。それなのに私は渡壁くんのこと思い出しもせず、自分のことばかり考えて、陸と別れて悲劇のヒロイン演じて、渡壁くんのことを疑って当り散らしてひどいことを言った。

「最低なのは、私じゃなか……」

何がこれからは相手の気持ちを考える、よ。私、何もわかってないじゃない。全然成長していない。

渡壁くんに謝らなきゃ。でも、まだ心の整理ができていない。ちゃんと整理して冷静になってから謝ろう。でないと、今の私は感情にまかせてまた渡壁くんを傷つけてしまうかもしれない。

それが一番怖かった。

その夜、私はなかなか寝付けなかった。

第7話

「美波、美波！」

バタバタと足音を響かせて、お姉ちゃんが私の部屋に入ってきた。同時に目を開ける。外が明るい。もう朝なんだ。眠れないと思っ
ていたけど、ちゃっかり寝ていたんだ。

「渡壁がおらん！」

「え？」

「このメモ書きがテーブルの上に残ったただけじゃった」

お姉ちゃんが見せてくれたメモ書きには、一言『お世話になりました』と書いてあるだけだった。

「そんな……」

私は愕然とする。

まだ謝っていないのに。お礼だって、他にも言いたいこといっぱいあるのに。

そうだ、携帯電話で連絡すれば……って、渡壁くんは持ってなかったんだった。このままだともう二度と渡壁くんには会えないかもしれない。そんな不安が胸をよぎる。

「ほら、美波モタモタせんと行くよ！」

「どこに？」

「渡壁を追いかけるに決まっとるじゃろ。どうせしまなみ通って帰るんじゃけえ、車で行きやあ追いつくかもしれんじゃろ」

「うん！」

私はそのままの格好で部屋を飛び出した。

お姉ちゃんの軽自動車に乗せてもらって、私は渡壁くんの姿を探した。けど、尾道大橋では彼の姿を見つけることはできなかった。

「どうしよう、お姉ちゃん」

「まだ大丈夫じゃって。因島大橋に向かっとなるんかもしれんし。自転車は橋の下を走るけえ、私は車で先回りするよ」

軽自動車はそのまま向島を抜けて、しまなみ海道の因島大橋を渡る。お姉ちゃんは軽自動車をバイク道の出入り口付近で停める。

「ここで渡壁が下りてくるのを待ったたらええわ」

「でも、もう渡つとるかもしれんじゃんか」

「大丈夫じゃって」

お姉ちゃんは妙に自信満々だった。だけど、ここでじっと待っていても不安は募るばかりで、私は待ちきれず軽自動車から降りた。そして、バイク道出入り口から因島大橋に入る。

どうか渡壁くんがまだ因島大橋を渡っていませんように。

そう祈りながら向島方面に向かって走る。

「……………」

因島大橋を渡りきっても渡壁くんの姿を見つけることができなかった。

もう瀬戸田まで帰ったのかな。それともお姉ちゃんの言うように、まだ因島大橋を渡ってないのかな。

張りつめていた糸が切れて、私はその場に座り込んだ。

私ってどうしていつもいっつもやるのが遅いんだろう。こんなことなら昨夜のうちに渡壁くんにちゃんと謝っておくんだった。変な意地を張ったりしなきゃよかった。

私の人生って、後悔ばかりだ。

涙の洪水が私の頬に直撃した。

「そんな所におったら原チャリにひかれるで」

背後から聞こえてくる声に、私は期待に胸をふくらませて振り向いた。

自転車に乗った渡壁くんがいた。

「槇原さん、泣きすぎ。鼻水出とる……」

苦笑する渡壁くんにそう言われて、私は慌ててスカートのポケットから昨日借りた渡壁くんのハンカチを取り出す。その時、渡壁くんからもらった縁結びのお守りもいっしょに出てきた。私は縁結びのお守りをポケットに戻すと、ハンカチで涙と鼻水を拭いた。

感動の対面が台無しだった。っていうか、女の子にそんなことを言うなんてデリカシーなさすぎ。

「百年の恋も冷める顔じゃな」

「うるさいなあ。千年の恋は冷めないからええんよ」

「千年も生きとられんで」

「そんだけ好きってことじゃろ！ ロマンの欠片もないんじゃけえ」
こんな会話している場合じゃないのに、出てくる言葉は気持ちとは裏腹なものばかりだった。

涙を拭きながら、私はある疑問点にたどりつく。

渡壁くん、私の背後から来たよね？

「渡壁くん、どうして因島から来るわけ？」

「え？」

あからさまに動揺する渡壁くん。

「えーっと、村神さんの車でずっと後ろを走つとたんじゃ」

渡壁くんはバツが悪そうに、鼻の頭をかいた。

私の思考回路がショートする。

しばらくして、思考回路が機能し始める。

「つまり渡壁くんは村神さんの車に自転車を乗せて、ずっと私たちの後をついてきていたってこと？」

「まあそういうことになるかの」

「どうしてそんなこと……」

言いかけて、気付いた。

お姉ちゃんだ。こんなこと思いつくのは、お姉ちゃんしかいない。どつりであんな自信満々に渡壁くんはまだ因島大橋を渡っていない

と言えたわけだ。自分の後ろにいることを知っていたんだから。

私が渡壁くんに謝るきっかけを作るために、こんな芝居をしたにちがいない。

そんなことしなくたって、私はちゃんと渡壁くんに謝れるんだから。そうよ、これから言うんだから。

「あ、あの……」

「槇原さん、ごめん！ 俺はやめた方がええって言うたんじゃけど、お姉さんがどうしてもやるって」

渡壁くんが頭を下げた。

先を越されて、謝るタイミングを失ってしまった。もう謝れないじゃない。どうしてこう間が悪いんだろ。

でも、今なら信じられるよ、渡壁くんの言葉。

「ええよ、別に。渡壁くんが悪いわけじゃないけえ」

悪いのはお姉ちゃんなんだから。

「その代わり、今度瀬戸田へ遊びに行った時に観光案内してもらうけえね」

「……………」

渡壁くんは面喰っていた。

私はスカートのポケットから縁結びのお守りを取り出す。袋を開けて、白いヒモでくくっている小ビンを渡壁くんに押し付ける。

今はこれが精一杯。

「これって……」

「それまで預けとく」

「俺がもらってええん？」

「とりあえず、実験。あのおばちゃん言うようにホンマに幸せになれるんかどうか。結果次第では今度会ったら返してもらうかもしれないけえね」

「実験は成功するに決まっとるが！ それに俺は一度もらったもんは返さんけえな」

渡壁くんは小ビンをしっかりと握りしめた。

今度会った時はちゃんと謝るからね。

私は心の中でそう呟いた。

「じゃあ私、このまま向島に帰るけえ。お姉ちゃんに向こうで待ってるって伝えといて」

「いっしょに因島まで行けばええじゃんか」

「嫌だ」

このまま渡壁くんといっしょに行ったら、お姉ちゃんの策略通りに事が運んだと思われてしまうのは癪だった。実際、私は渡壁くんに謝ることができなかったわけだし。これは私のささやかな抵抗。

「わかった。槇原さんはぶてて帰った、って言うとかわ」

渡壁くんも私の気持ちを察してくれたのか、笑ってそう言った。

「じゃあまたね」

「おう、またな」

渡壁くんはとびつきりの笑顔で手を振って、因島方面へ向かって自転車を漕ぎ始める。

私は渡壁くんの後ろ姿をずっと見送る。

渡壁くんの姿が見えなくなると、私は新たな気持ちで向島方面に向かつて歩き出す。その私の気持ちを反映するかのように、海面が朝日をキレイに照らしていた。

終

第7話（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。
感想など一言でもいただけると、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4501e/>

自転車と絆創膏と縁結びのお守り

2010年10月8日13時38分発行